

## ●研究の目的（背景、範囲）

本研究の目的は二つある。

1) オーラル・ヒストリーの手法を用いて、フルクサスに関わったアーティストに聞き取り調査を行ない、「フルクサス」についての基礎資料をつくることを目的とする。フルクサスについてはこれまでも欧米を中心として多くの資料が出ているが、活動の実態は十分に捉えられているとはいえず、とくに日本人アーティストの証言は少ない。多くの日本人に関わった「フルクサス」という前衛芸術運動とは何だったのか、その実態について資料をまとめてアーカイブ化し、英語に翻訳して世界に発信していきたい。インタビューの対象は日本人を中心とするものの、日本人に限定するのではなく、機会をとらえて可能性のあるアーティストから行なっていく予定である。

2) もうひとつの目的は、この基礎資料をもとに、フルクサスという運動において、「音」が果たした役割を考察、研究することである。フルクサスの運動にはしばしば音楽家関わっており、「音」はひじょうに重要な役割を果たしていた。このオーラル・ヒストリーのプロジェクトでも、「音」に関わることを含めてインタビューを行ないたい。そのうえでフルクサスの運動をサウンド・アートの先駆的な試みとして捉える可能性を探ってみたい。

## ●計画、方法

まず、比較的コンタクトのとりやすいアーティストからインタビューを開始する。初年度は、東京都現代美術館で開催された「フルクサス・イン・ジャパン2014」のために来日したEric Andersenのほか、AY-0、塩見允枝子各氏へのインタビューを行なった。基本的に2人一組で行なうが、場合によっては一人でインタビューを行なうこともある。Andersen氏の場合は、急にインタビューが決まったため、一人で行なった。2年目には、イタリア在住のPhilip Cornerなどへのインタビューを予定している。

## ●成果報告の方法、意義

インタビューは録音の書き起しを行ない、インタビュー対象者の内容確認を経て、芸資研ホームページ上で公開する。日本語でのインタビューには英訳を、英語のインタビューには日本語訳をつけ、日英二カ国語での公開を目指す。フルクサスについてこれまでにあまり知られてこなかった内容をネット上で公開し、広く知ってもらうことは重要である。とくに、美術の運動として捉えられてきたフルクサスに、音楽出身のアーティストが大きく関わっていることを知ってもらう意義は大きいと思われる。